

【ポスター発表】

多文化共生社会における「当事者視点の支援」の再考

「在日外国人家庭における未就学児多言語教育ワークショップ」のふりかえりより

徳永あかね（神田外語大学）、吉田千春（明治大学大学院）、ゴロウィナ クセーニヤ（東京大学）、菊地真弓（イクリス^{*}いちかわ）、安藤陽子（イクリス^{*}しんじゅく）

※ICRIS（Intercultural Child-Rearing Information Station）

キーワード

在日外国人、子育て当事者視点、当事者企画・参加型、潜在的な問題の可視化過程

1. 問題提起

本研究では、日本在住の外国籍および外国にルーツを持つ日本籍の住民を「在日外国人」と称する。「在日外国人」は個々のライフサイクルのなかでどの時期に日本に居住するかにより定住を促す要因が異なる（徳永・吉田・鈴木 2013）。従って、長期滞在を前提とした共通の支援とは別に個別の状況に応じられるような支援体制が求められる。

日本で生活するなかでどのように対応すべきか迷ったり悩んだりする場面に遭遇した場合、同国人同士か否かに関わらず、同じライフステージで同様の状況に身を置く者同士から多くの示唆を得ることができる。こうした当事者同士での日常的なコミュニケーションは、問題を未然に防ぐ効果もある。インターネットを通じて見ず知らずの者同士がつながることができる環境を前提として、「当事者視点の支援」の意義を見直したい。

2. 「子育て当事者」と「当事者意識を持つ参加者」

当事者とは「その事柄に直接関係している人」（国語辞典 goo 辞書）であり、具体的な状況の中から物事を見ている人たちを指す。今回実施したワークショップには、「子育て当事者」である子育て中の母親や父親が参加した。当事者とは別に、子育て支援グループの関係者、在日外国人支援に関心を持つ研究者なども参加した。本研究では、後者の参加者を前者の当事者と区別し、「当事者意識を持つ参加者」と呼ぶ。

3. 子育て当事者企画・参加型ワークショップ

子育てサークル I は、初めての育児に直面した母親同士が偶然出会い、立ち上げた NPO である（安藤 2015）。今回のワークショップは、サークル I のイベントの一つとして企画された。2015 年 7 月と 11 月に異なる地区で実施し、2016 年 3 月にも別の地区で実施する。

子育て当事者がワークショップを企画した意図は、具体的な問題とその解決策の提示ではなかった。国際結婚家族での言語使用について考える場としてワークショップを開き、自らも参加し、講師の話を聞いたり互いの現状を共有し合った。そして、多言語環境での子育ては在日外国人だけが直面する問題ではなく、海外勤務により海外で子育てをする可能性がある日本人も直面する状況であることも認識された。ワークショップを重ねる過程において「多言語環境における子育ての言語問題」が具体的な事例とともに可視化されきた。これは、企画側、参加者側の双方が子育て当事者であったために「気がかりな問題」を共有する過程において「今、ここにある取り組むべき問題」として当事者が捉え直すことができたと考える。さらに、顕在化された問題について個々の当事者が自分の状況に照らして対応を選択したり、準備する機会ともなった。

当事者視点の支援においては、当事者自身に潜在的にあった問題を共有し、可視化する過程を持つことが重要であると考え。この過程こそ、当事者自身が自分の状況に合った選択肢のなかから今後の道筋を考える機会をもたらし、個別の状況に応じた当事者視点の支援策となる。

4. 今後の課題

今回のワークショップのように当事者同士がつながり、情報を交換し合う場を作るにはそれなりの予算が必要である。地方公共団体の助成金の申請への道しるべとして、企画に掛かる費用や労力などをまとめたハンドブックの作成を目指したい。

文献

- 安藤陽子（2015）「就学前子育ての場における多文化社会コーディネーターの必要性と役割」『多言語多文化-実践と研究』Vol.7 東京外国語大学
- 岡本祐子（1999）『女性の生涯発達とアイデンティティ』岡本祐子編著 北大路書房
- 徳永あかね・吉田千春・鈴木寿子（2013）『定住外国人女性のアイデンティティに関する調査報告』神田外語大学研究助成パイロット研究成果報告書